

靖えもん先生(🇯🇵&🇦🇺&🇮🇳) 第2回



獣医学部の憩いスペース



オーストラリア人、好きならば BBQ しがち

続きまして、第2回目の配信です。大学生活について色々伺ってきました！

獣 TIMES(以下獣)：オーストラリアの獣医大学へ進学なさる際、**不安や寂しさはありましたか？**

先生：この質問を受けて改めて思い返したんですが、驚くほどそういった記憶がないんです(笑)。

獣医学を勉強したくて、そっちのポジティブな感情が勝っていたんでしょうね。

あと、前回の記事で話した、高校卒業後に1年間通った関西の専門学校は「アメリカの獣医大学に進学したい学生用コース」なんてニッチなコースだったので、**クラスメートは当然みんな海外獣医大学への留学を目指していたから、そういった仲間がいたことも不安や寂しさを感じなかった理由かもしれません。**

獣：そういうコースがあるんですね。

先生：余談ですが、このコースは「アメリカの提携大学の2年次に編入できる」というのが売りだったのですが…調べるほどに「2年に編入したとて、獣医課程に外国人が進学するのって狭き門にも程があるだろ」と感じました。そうしてアメリカ以外の選択肢を必死で探して見つけたのがオーストラリアでした。

獣：先生以外にもオーストラリアに進学した生徒はいましたか？

先生：自分だけです。後から2、3人オーストラリアの語学学校や Foundation course (大学入学準備&入試コース) に来た人も居ましたが、自分が知る限り獣医大学に進んだ人は居ませんでした。

獣：学生時代に興味深かった実習や授業について教えてください。

先生：日本の獣医の授業内容をあまり把握してないので、日本の皆さんにとって「興味深い」と感じられるエピソードかはわかりませんが…個人的に興味深かった点を箇条書きしますね。

- 座学は出欠確認なし、**授業内容は録音(音声のみ) & オンライン配信でいつでも復習可能**。なので、座学の授業は1度も出席しなくても試験や課題をクリアする実力があれば単位は取れる。
- 1年前期に「大学内の単位どれでも1つ好きなのを履修していい枠」があった。クラスメートはみんな生物・化学系を選んでいただけ、自分は基礎心理学の単位を取った(1人だけ全然違う建物に移動でアウェー感満載だったけどおもしろかった)。



授業風景

- 微生物学のテストは「Open book（教科書持ち込み）」式で記憶力より検索力や応用力を問われた。
- 4年次の外科実習は3人1組で不妊・去勢それぞれの執刀、助手、麻酔を順番に担当（つまり合計6回）する。5年次のローテーションでも、シェルターで不妊去勢の執刀、外科でそれ以外の手術の助手などを経験する。また、動物病院アルバイトをしている子などは学生のうちから「獣医師の監督下」で手術を経験することも可能。
- **解剖実習はドッグレース業界で「安楽死処分」になった子達の検体**を使用させてもらった。
余分な脂肪がないし、筋肉とかめっちゃ綺麗でわかりやすい。
- クラスメイトに筋金入りの**動物愛護活動家かつヴィーガンの子がいた**のだけど、「ドッグレースで“廃用”になって安楽死された検体を使うのは受け入れられない」とのポリシーを持っていた。そのため、**大学側が「人道的理由で安楽死になった個体」を特別にその子のために用意していた**。
- 解剖実習が終わった後に、切り取った部位が廃棄容器に捨てられていくのがなんだか犬達に申し訳なく感じて、**せめて自分用の骨格標本にできないかと標本作成専門スタッフに直談判に行った**。解剖実習用に一度ホルマリンで固定した検体は骨格標本にするのには適していないのだが、「**こんなことを頼んでくる学生は初めてだよ！HAHAHA！**」と言いながら、その後数ヶ月間私と一緒に**試行錯誤しながら骨格標本を作ってくれた**。
- **学生がやりたいと意思表示したものを最大限尊重し、できる限り協力してくれるのが当たり前って感じの空気は、学習環境として非常に居心地が良かった。**



獣：クラスメイトの比率はどういった感じでしょうか？

先生：あくまで自分の記憶ですが、オーストラリア人で高校から直接進学した現役生が4～5割、社会人枠が2～3割、英語圏である北米（アメリカ、カナダ）&イギリス&アジア（香港、シンガポール、マレーシア、インドネシア etc）からの留学生が3～4割、非英語圏（日本、中国本土、イタリア、アラブ etc）からの留学生が0.5割って感じだったかと。

男女比は2～3：8～7くらいと記憶しています。LGBTもあたりまえで、教員にも生徒にもゲイのカップルとか居ました。最年長で50代女性も居たし、シングルマザーも居たし、とにかく**多様性が豊か**でした。



獣：授業以外の日常生活で印象に残ったエピソードがあればお教えてください。

先生：これも箇条書きで羅列しますね。

- 2年生の前期が終わった時点で「Half Way Day（卒業までの振り返り地点）」というでっかいお祭りをやるのだけど、そのために1年生の時からいろんな資金調達をやる。
中でも『**Cow pat lot（牛フン宝くじ：牛が区画内のどこに糞をするか賭ける宝くじ）**』や『**ヌード・カレンダー（学生がフルヌードになり、大事なところは動物や医療器具などで隠した写真を使ったカレンダー）**』なんかはなかなかパンチ効いてたなど。
- 週に1回「**仮装デー**」を開催した学期があった。「パジャマ」とか「虹色」とか決まったお題のコスチュームで登校&授業をうける謎イベント（その際、先生が「今日は何の日なのwww」となる）。
- クラスメイトが馬を飼っているという話を聞いた時に、（オーストラリアでは馬を飼ってる人がけっこう居ると知らなかったから）「あなた、お金持ちなんだね！」と言ったら「私は金持ちじゃないよ！両親の資産だし、私は学費も親から借りているんだもの。」と答えたのが目から鱗だった。
親子の間でも「個」として自立しているし、大学に進学する覚悟が違う。



- 学部全体で希望者を募って実施する「Overall Pub Crawl (ツナギでバーをハシゴ)」というクレイジーな飲み会があった。参加者全員、大動物の実習時に着るツナギを着て集合、街に繰り出し、数件のバーや飲み屋を渡り歩くって言う(笑)。
- 日本でいう「サークル」的なものはないけど、**学生が自主的に経営学とか栄養学とかの Study Group** を作って、セミナーとか外部の施設見学とかをやっていた。参加する・しないはもちろん自由。授業にしても日々のこういった活動にしても、**とにかく自主性を求められる場面や、既存のものや型にとらわれない発想を実現していく場面が多く**、自分にとってはこの経験が大きな学びだった。
- **保護されたカンガルーの赤ちゃんの里親ボランティア**をやった。もともと、授業に自分の犬を連れて参加しているクラスメートなどもいたので、**授業の時にはエコバッグに入れたそのカンガルーを連れて行っていた**。
- 毎年「Australasian Veterinary Student Conference (4日間開催)」というイベントがある。オーストラリアとニュージーランドの獣医大学の生徒が、その年の持ち回り大学に集まって実習や講義、パーティーをする学生学会みたいなもの。自分が4年の時にウチの大学が主催になったので、自分も参加した。
- **教員との距離が近い**。基本的にファースト・ネーム呼びだし、学生に教えた教育熱心な人たちが大学に残って教員をやっているのので、みんなめっちゃ教えてくれる。例えば、外科教授に「リック、いま時間いいですか？こないだの授業でわからないところがあって。」とか、学長に「ジョン、今度こういうイベントやりたいので許可ください〜。」みたいな距離感。ちなみに「教授」は必ず全教科に居るわけではなく、その科のトップが助教授とか上級講師ということもザラだった。というのも、**教授になるには研究や論文の実績はもちろん、人格も問われるそう**で**(同僚や部下からの評価とか)**、**教授になるハードルがめちゃくちゃ高いかららしい**。実際、**教授の肩書きを持つ人達には人格者しかいなかった**。



Overall Pub Crawl、街のバーにて



里親として世話をしていたカンガルー



AVSCの夜のクルーズ・パーティー

獣：興味深いエピソードをたくさんありがとうございます！！

日本では、小動物臨床を目指す学生が多いですが、オーストラリアの獣医学生も同じでしょうか？
野生動物の方面に進む学生は多いでしょうか？

先生：正確な数字を把握しておらず、あくまで感覚的な話なのですが…

やはり一番多いのは小動物臨床だったと思います。

大動物または Mixed practice (大動物と小動物両方診る病院。大動物と小動物の割合は場所や病院によって様々) の割合は日本より多い印象です。

野生動物系に進む人もいますが、日本と一緒にフルタイムの職は絶対数が少ないです。ただ、野生動物の保護施設やボランティア活動は多いので、獣医&獣医学生だけでなく一般の人でもそういうのに参加している人はたくさんいます。自分も学生時代はボランティアやりましたし。あとは、割合として多く無いけど公務員とか研究、企業に進む人も居ましたね。その辺は日本と同じかな、と。

獣：ありがとうございました！次回はインドのお話を伺っていきます！

(文責：獣 TIMES 高際)



小動物の身体検査ワークショップ



馬のローテーション時、去勢の実習